

Netwo

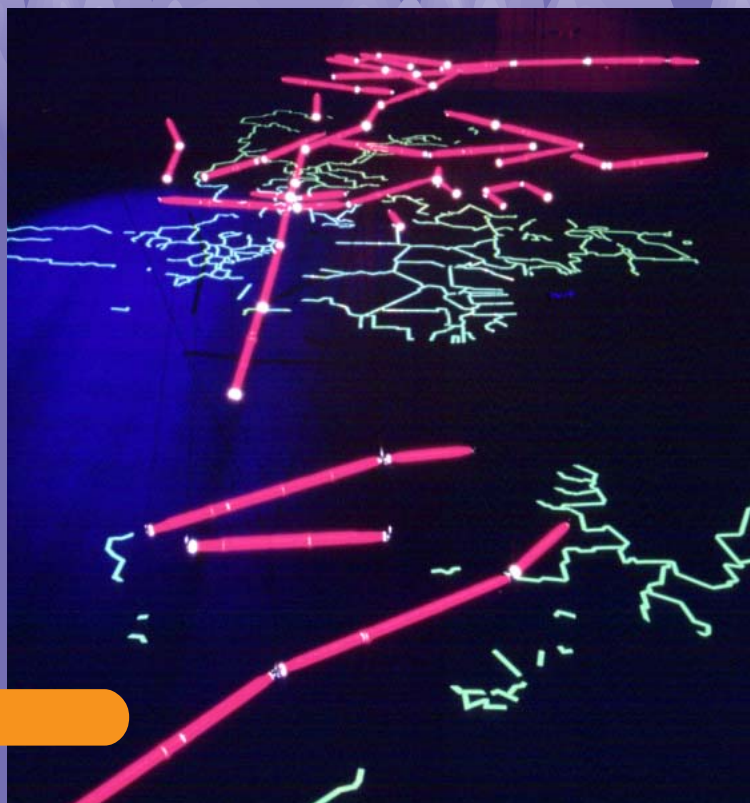
インターネットがアートになった

ネットワークアート

最前線

インターネットマガジン編集部編

絵画や写真など、自分の作品をウェブサイトで展示しているオンライン・ギャラリーではなく、JavaスクリプトやHTMLを駆使してウェブサイト自体をアートにした作品も最近登場し始めた。インターネットの普及によって、「アート＝美術館で見るもの」という概念が覆され、メディア・アートの世界では、従来の3Dやバーチャルリアリティーなどのほかに「ネットワーク・アート」という新しいタイプのアートが生まれようとしている。今回は、インターネットで作品を制作しているアーティストや現代美術の国際展を取材し、ネットワーク・アートの現状に迫ってみた。



インゴ・ギンター「難民共和国」
(写真提供：P3 art and environment 撮影：萩原美寛)

Art

インターネットを使って作品を作るアーティストたち

インターネットのネットワーク機能を利用したアート作品があるのをご存じだろうか。それまでコンピュータなどのデジタル機材を使用した作品などはメディア・アートと呼ばれる方をしてきたが、初めからデジタルネットワークを通して見せるような作品も登場してきた。

たとえば、クマやカメラがメールを届けてくれるユニークなメールソフト「ポストペット」などがその例である。「ポストペット」はメールソフトとして知られているが、それを考案した八谷和彦は「メガ日記」(注1)など、ネットワークを利用したアート作品を発表しているアーティストだ。

また、昨年、坂本龍一とのコラボレーション「MUSIC PLAYS IMAGES × IMAGES PLAY MUSIC」(注2)で坂本の演奏に合わせてメディアアートを披露した岩井俊雄もネットワークを使った作品を発表している。リアルタイムにアーティストと鑑賞者が呼応しながら作品を作っていくという、ネッ



「MUSIC PLAYS IMAGES × IMAGES PLAY MUSIC」(写真提供：水戸芸術館)

トワークならではのインタラクションを活かした作品だ。

このほかにも、現代美術の国際展「ドクメンタ」(298ページ参照)で、ウェブサイトを使った作品を発表したムンターダスやNTTインターコミュニケーション・センター(299ページ参照)でインターネットと衛星放送を使ったリアルタイム中継を行ったインゴ・ギュンター(注3)などもネットワークを使って作品を制作しているアーティストだ。

これらの作品はまだ少ないが、今後はアートという枠組みを超えて注目されてくるだろう。



「ポストペット」

<http://www.so-net.or.jp/postpet/>

「メガ日記」

<http://www02.so-net.or.jp/~mega/>



(注1)

100日間100人の人々がネットワーク上で記した日記をインターネットやBBSで公開するプロジェクト。1995年から定期的に行われている(97年は9月から再開予定)。全世界の人と日記を交換する「テラ日記」や永遠に続いていく「ギガ日記」などのプロジェクトも続行中。

(注2)

坂本龍一のピアノに合わせて岩井俊雄が作成したデジタル映像がコンサートホールのスクリーンに映し出されるコラボレーション。昨年12月に水戸芸術館で行われ、当日のライブの様子はインターネットで中継された。<http://www.icmas.ac.jp/~iwai/mito/>

(注3)

世界中の難民をネットワーク上に集めて仮想国家を作るプロジェクト「難民共和国」(<http://refugee.net/>)を発表したドイツのアーティスト。



ポストペットを作ったアーティスト 八谷和彦インタビュー

Q ポストペットを作られたきっかけは?

A ある日ディベアがグリーティングメールを運んでくるという夢を見ました。それをパティオ(二フティサーブの電子会議室)で話題にしているうちに、これはもう作るしかないようになってしまったんです。確かに、Eudoraみたいに優れたメールソフトはいろいろあるけれど、味気ないからあまり使いたくなかったんですね。たとえば、普通の郵便とかでもエアメールで来たりとかが、かわいい封筒に入ってきたりとか、ってうれしいじゃないですか。かといってメールに絵を付けるっていうのはあまりに安易だから、やりたくなかったんです。前から何かアプリケーションを作ってみたかったんですけど、一日のうち一番多く起動させるソフトは何かって考えると、やっぱりメールソフトだったわけです。

Q ウェブでは作品を作らないんですか?

A ウェブサイトって、いわゆる作品展示の場所としてはあまり向いていないと思うんです。人によって見るモニタの環境や画像の重さの感覚があまりに違う。あと、ウェブで一番重要なのは更新していくことだと思うんですけど、マメな人ほど向いているっていうか。ぼくは全然マメじゃないんです。メガ日記っていうのは、人が勝手に書いていくので自分がやなくていいっていうのがあって楽だったんです。これを始めたきっかけもやっぱり夢なんです。図書館の蔵書がすべて日記っていう夢を見ました。通信を使って世界中のいろんな人の日記がランダムに読めるような日記図書館を作ろうと思いました。最初はICCのファーストクラスと二フティサーブとインターネットで始めたんです。当時は「インターネットも流行りだから入れておこう」という感じでしたが。



八谷和彦(はちや・かずひこ)

1966年佐賀県生まれ。九州芸術工科大学画像設計学科卒業。お互いの見えているものを交換する装置「視聴覚交換マシン」で注目され、以後コミュニケーションをテーマにした作品を制作している。秋には、ポストペットのキャラクターグッズを販売する予定。

Q 今後の予定は?

A ポストペットの一番の特長であるサーバーと関連しているんなことができるということを強化したいと思っています。たとえば、サーバーに宝物が置いてあって、何匹かのペットがパーティーを組んで宝を探しにいくというロールプレイングゲームみたいなシステムや、ペット同士のチーム対戦みたいなこと今のポストペットを使ってできるように作ってあるので、今後はそちらの作業がメインになります。(都内アトリエにて取材)

現代美術の国際展に ネットワーク・アートが登場

現代美術の国際展「ドクメンタ」がドイツのカッセルで開催されている（9月28日まで）。この国際展は世界で活躍している現代美術アーティストの作品を紹介するもので、美術関係者の中で注目されている展覧会だ。



ここ（ドクメンタホール）の地下1階にウェブサイト展示会場が設けられた。



ドクメンタ

5年に1度ドイツのカッセルで開催される現代美術の国際展。キュレーターが選んだ各国のアーティストの作品が市内の美術館や屋外で展示される。今年は6月21日から9月28日まで開催。



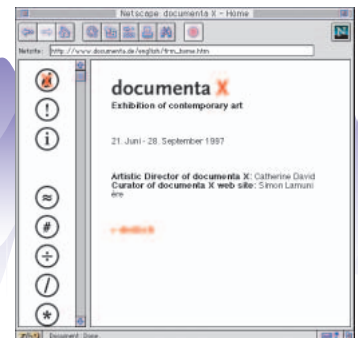
会場に約20台のモニターが置かれ、来場者が自由に作品にアクセスできるようになっていた。もちろん、日本からでもインターネットで作品を鑑賞できる。

そこで今回初めてウェブサイトの作品12点が出展された。これらの作品はすべてブラウザで見られることを前提に作られ、そのうちの10点は今回の国際展にあわせてあたらに制作されたものだ。

「アルスエレクトロニカ」（299ページ参照）や「シーグラフ」など、コンピュータ・アートの国際展ではインターネットを使った作品がすでに展示されているが、国際的な現代美術の国際展でウェブサイトの作品が展示されるのは珍しい。その意味でも、このような試みは今後の話題を呼びそうだ。

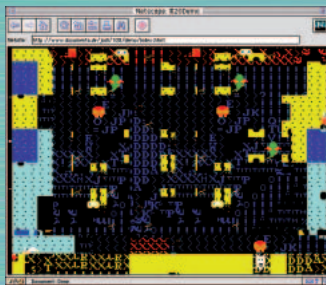


カッセルの駅周辺や美術館、町中の広場を利用して作品が展示される。



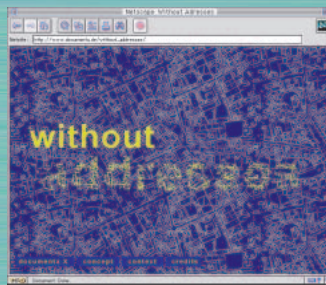
documenta X
<http://www.documenta.de/>

ドクメンタに出品されたウェブサイト紹介

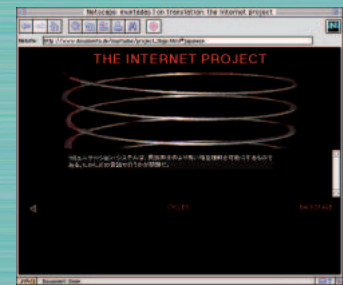


jodi.org
by Joan Heemskerck / Dirk Paesmans
<http://www.documenta.de/jodi/100/>
<http://www.jodi.org/>

プラグインやJavaスクリプトを駆使した動きのあるウェブサイト。アクセスするだけで自動的に動き出す画像を鑑賞できる。今年のアルスエレクトロニカのネット部門に入賞。



Without addresses
by Joachim Blank & Karl Heinz Jeron
http://www.documenta.de/without_addresses/
ブラウザ自体をネットワーク上の地図に見立てた作品。Javaスクリプトを使うことにより同じポイントにアクセスしても、毎回違った場所にリンクするようになっている。



On Translation
by Muntadas
<http://www.documenta.de/muntadas/>
ウェブサイトの各部にポイントを合わせると、世界各国の言語で書かれた標語が表示される。国際社会における翻訳の意味について再考を促す作品。

ネットワーク・アートが見られる 国内外の美術館

国内

NTT インターコミュニケーション・センター(ICC)

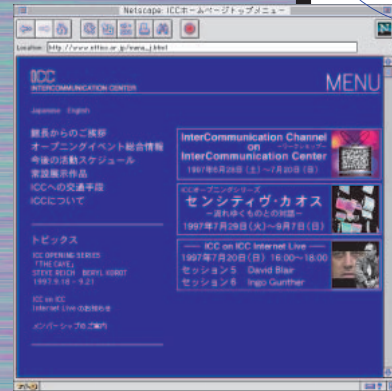
今年の4月19日に東京・西新宿のオペラシティ内にオープンした次世代型ミュージアム。メディア・アートなどの最先端のテクノロジーを使った作品や従来の美術という枠組みにとられないような作品を中心に収蔵している。

常設展示のほか、随時企画展が見られる。オープニングには、「岩井俊雄展--そのメディア・アートの軌跡」と磯崎新の建築プロジェクト「海市・もうひとつのユートピア」が開催された。このほかにも会場にアーティストを招いてインターネットと衛星テレビでライブの様子を放送するワークショップなどを行っている。映像作品やマルチメディアコンテンツが閲覧できる電子図書館も併設。



写真提供：NTT インターコミュニケーション・センター
©三輪晃久写真研究所

所在地：東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー4階
開館時間：10:00～18:00 金曜日のみ21:00まで
(入館は閉館の30分前まで)
休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)
交通案内：京王新線初台駅から徒歩3分
問い合わせ：TEL 0120-144199
query@ntticc.or.jp



NTT インターコミュニケーション
センター
<http://www.ntticc.or.jp/>

海外

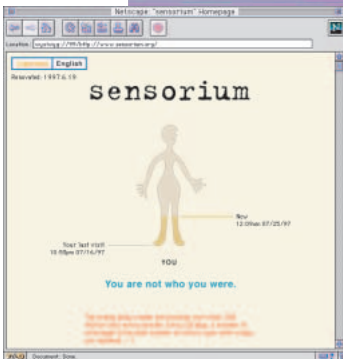
アルスエレクトロニカセンター(Ars Electronica Center)

1987年から毎年行われているコンピュータアートの国際フェスティバルをきっかけに、96年9月、オーストリアのリンツに作られた総合メディアアート・ミュージアム。地上5階、約2000平方メートルの施設内では、マルチメディア、バーチャルリアリティ、サイバースペースなどが体験できる。

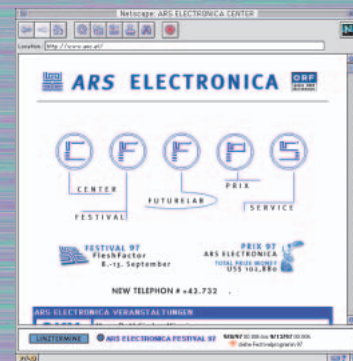
毎年「アルスエレクトロニカ・フェスティバル」が行われ、国内外のコンピュータアート作品が紹介され、優れた作品には賞が贈られる。ネット部門、インタラクティブ部門、音楽部門、アニメーション部門があり、今年はネット部門で、インターネットワールドエキスポジションの日本テーマ館「SENSORIUM」(<http://www.sensorium.org/>)がグランプリを受賞した。このほかにも、「Music plays Images x Images play Music」がインタラクティブアート部門のグラン

プリを受賞、八谷和彦の「見ることは信じること」も同部門で受賞するなど、日本の作品も高い評価を受けている。

今年のフェスティバルは9月8日から13日まで開催の予定。



SENSORIUM
<http://www.sensorium.org/>



所在地：Hauptstrasse 2, A-4040 Linz, Austria
開館時間：11:00～19:00
休館日：月曜日、火曜日
問い合わせ：TEL +43-0-732-712121
FAX +43-0-732-712121-2
info@aec.at



写真提供：
アルスエレクトロニカ

Ars Electronica
<http://www.aec.at/>



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp